

口語詩句賞／総評

高橋修宏

今年9月より選考委員を務めて、初めての年間賞のため、その基準をいかに設けるかなど、悩みながらも選考に臨んだ。結果的には、あまり既視感を持たないで、各々が自選された10作品に臨むことができたように思う。

「口語」というゆるやかな規定はあるものの、やはり詩から短歌や俳句に至るまで、同一線上で選考することは容易いことではない。そのため基準としたのは、まず作品としての自立性ということ。つまり、リリック（抒情）であれ、ユーモアやアイロニー（反語）であれ、その言語空間から詩としてのポエジーが手渡されるかということを重視した。

次に、10作品を通じて或る作者像と呼びうるものが立ち上がるかということ。それは別段、一貫したテーマ（主題）ということでもなくとも、何かを表現したいという主体が明確に在るはずであり、それが作品の語り口やスタイルを形成する基底となっていくものである。しかし、たんなる自己主張や自我意識の直接的な表出ではないことは、ここで強記しておきたい。

新人賞は、郡司和斗（344）と橋田純寧（1410）の決選投票となった。郡司は、日常的な語り口がシームレスなまま、ふいにポエジーを立ち上げる手法が巧みだ。また橋田は、〈私〉という存在に対する問いが、やわらかな筆致の中で結晶する。各々の作品に魅力を感じながらも、ポストヒューマンと呼びうる感触をそなえた橋田を推した。また、とりわけ気になった梶伸太郎（1055）。多形表記の俳句を思わせる表記や読点の位置の工夫など、一篇をビジュアルとして提示する試みも面白く感じた。

以下、入賞作から、小生が選考中にチェックした作品を一篇ずつ掲げることで、今回の任に代えたい。

〈新人賞〉 郡司和斗

- ・電話がまだ／うつくしかった季節に／よく靴を
磨いた

〈優秀賞〉 橋田純寧

- ・私という結び目を／沢山、つくりすぎると／音が
滞ってしまうよ

〈優秀賞〉 奥村俊哉

- ・本屋には死角が欲しい／棄てられた文字／
あつまって／蛍になるから

〈奨励賞〉 吉沢美香

- ・夕立の一粒ごとにある鏡

〈奨励賞〉 中矢 温

- ・箱舟は全員故人ならいいか

〈奨励賞〉 梶伸太郎

- ・サイコロの1の目／くぼんだところの、／東京

〈奨励賞〉 豊富瑞歩

- ・夕焼けを眺める人の目の中に／抜け道があるかもしれないよ

〈奨励賞〉 江藤裕子

- ・花粒立ち昇るホルンのふくよかさ

〈奨励賞〉 永山愛望

- ・夜側の足を浮かせて／少しだけ／お昼を長くする
フラミンゴ

〈奨励賞〉 山本 巧

- ・バナナ剥く／次元が変わったりする